

【実践報告】

# 「私」を求めて： シニア劇団星組の稽古場から

細見 佳代(NPO法人劇研シニア劇団「星組」担当講師)

## 抄録

高齢者人口の増加と平均寿命の延び。長期化した老年期をどのように充実して過ごすかが、今、社会的な問題となっている。

そんな中、演劇を始める中高年が増えている。全身を使い、集団で行う演劇活動は、中高年世代の「健康づくり」「仲間づくり」「生きがいづくり」に寄与すると言われてきた。しかし、NPO法人劇研シニア劇団「星組」の参加者は、演劇活動をすることは「自分を見つめ、自分を揺さぶることだ」と語る。

本稿ではシニア劇団「星組」の活動内容を紹介し、劇団員の現場の声を参照しながら、劇団に参加した中高年の想いを探っていく。人生の半ばを過ぎた世代にとって、演技する＝役を演じることは、どのような意味を持っているのか？

シニア演劇というジャンルがもつ可能性について検討する。

## Key word

シニア演劇、自己像、他者

## 1.はじめに

本稿は筆者がNPO法人劇研で指導をしているシニア劇団「星組」の活動実践報告である。現在、星組の劇団員は13名(男性2名・女性11名)で、平均年齢は67歳。週に1度の練習と年に1～2回の公演を行なっている。

筆者は元々舞台俳優で、高校や大学で演劇の指導をしている。以前から高齢者の身体表現に関心があり、2007年よりシニア劇団星組を担当している。本稿では劇団星組の活動報告を通して、演じることが中高年世代にとってどのような意味をもつのか考えてみたい。

## 2. 社会的背景と先行研究

内閣府の高齢社会白書によると、2017年10月時点で65歳以上人口は3,515万人となり、総人口に占める割合(高齢化率)は27.7%となった[内閣府2018]。高齢者人口の増加と平均寿命の延びにより、長期化した老年期をどのように充実して過ごすかが社会的な問題となっ

ている。そんな中、演劇を始める中高年が増えてきた。全国のシニア演劇に関する情報を掲載しているサイト「シニア演劇Web」を運営する朝日恵子氏によれば、「シニア劇団は2015年の段階で全国で120前後存在し、この4年で倍増」[朝日2015:19]しており、シニア演劇の全国大会や国際演劇祭も実施されている。

また、園部友里恵氏は、高齢者の演劇活動を採り上げた新聞記事に着目し、その分析を行っている[園部2015]。それによると、新聞上で高齢者の演劇上演に関する記事が登場したのは1970年代からで、当初は、地域の民話や戦争体験などを伝えるなど「歴史の継承、高齢者の思いを後世に伝える」ものや、犯罪抑止の寸劇などを通して「高齢者が高齢者への働きかけ」を行うものが多かった。2006年に演出家の蜷川幸雄氏が高齢者の演劇集団さいたまゴールドシアターを結成した頃から「高齢者だからそこそこの身体表現の可能性」が語られるようになり、その後、団塊の世代の定年退職が始まった2007年を境に「シニア世代の活力を引き出し、セカンドライフを充実させる」ことが演劇活動のねらいとして語られるようになった。そして1970年代から現在まで、一貫して高齢者の演劇活動の狙いとして語られているのが、「健康づくり」「関係づくり」「生きがいがづくり」というキーワードだという。

実際、大阪市内の100名のシニア劇団参加者を対象に行われたアンケート調査では、演劇を始めたことにより「健康管理に力を入れるようになった」と71%の人が答えており、86%の人が「人間関係が広がった」、71%の人が「夢や目標ができた」と答えている[スティックシアター2016]。演劇が、健康や仲間作りに寄与することは、異論のないところだろう。しかし、それがなぜ敢えて演劇なのかということは先行研究では言及されていない。「健康づくり」「関係づくり」「生きがいがづくり」という狙いは、特に演劇でなければ達成できないことではなく、体操や合唱を行うことでも達成できる狙いである。しかし前述のアンケート調査で「演劇を始めた理由は何ですか?」という問いに対して、選択式の答えの中から「演劇に関心があった」を選んだ人は約60%、「何でもいいからやりたかった」を選んだ人は15%であった。参加者は演劇というジャンルを意識的に選んでいる様子が伺える。

他に高齢者と演劇に関する先行研究としては、認知症ケアや介護予防など医療福祉分野において、プレイバックシアターや心理劇の手法を用いた研究が見られるが、シニア劇団参加者のようないわゆる「普通の中高年」を対象としたものは発展途上と言える。

本稿では演劇の実践報告を基本とし、劇団員の声を参照しながら、彼らが演じることをどのように捉えているのかを探っていく。それによって、中高年世代限定の「シニア演劇」というジャンルがもつ可能性について検討したい(なお、シニア劇団が何歳以上をシニアと定義しているかは、各劇団によって異なる。NPO法人劇研シニア劇団の場合、参加条件を50歳以上と規定しているため、ここではその世代が行う演劇活動を「シニア演劇」と呼ぶこととする)。

### 3. 星組劇団員アンケート

筆者は2016年に星組劇団員に、記述式のアンケート(以下10項目)を行った。

- ①星組の在籍期間
- ②参加動機
- ③演劇経験の有無
- ④年齢を重ねて演劇を始めたことについて、良かったことはありますか？  
「ある」と答えた方にお聞きします。その理由をお書きください。
- ⑤演劇活動の中で、楽しいことはありますか？  
「ある」と答えた方にお聞きします。それはどのようなことですか？
- ⑥演劇活動の中で、苦しいことはありますか？  
「ある」と答えた方にお聞きします。それはどのようなことですか？
- ⑦演劇活動の中で、「自分と戦っている」と感じることはありますか？  
「ある」と答えた方にお聞きします。それはどのようなことですか？
- ⑧演劇を続けている理由は何ですか？
- ⑨あなたにとって演劇とは何ですか？ ひと言でお答えください。
- ⑩今後、シニア劇団でやってみたいことはありますか？

※ アンケート結果の記述全文は、表1として本稿末尾に添付する。

「星組」参加者は、自営業、公務員、専業主婦、定年退職者、介護中の人など様々な背景をもっている。②の参加動機を見ると、「自分を開放できると思った」「自己表現する機会が欲しかった」「自分の居場所探し」、「今までの生き方を変えたいと思った」などの答えが多く、自分の人生を見つめ直し、自分を再生したいという想いをもって参加した様子がうかがえる。こうした中高年の心理について関連すると思われるのが、『中年クライシス』を書いた河合隼雄氏の次の指摘である。

中年も少し年をとってくると、改めて自分という存在に目を向けることになる。いったい自分というのは何者なのか。もちろんそんなことは誰も若い時からある程度考えるものだ。若い時だって自分というものを大切に思い、自分を生かしてゆきたいと思う。そして一般的に言えば自分のやりたい職業とか結婚したい相手などが見つかるとそのなかで自分を確立してゆくことになる。(中略)

しかしそれだけで十分だろうか。年取がどれだけ多くとも「年取」を大きい支えとしている人は他の非常に多くの人々と同じ人生を歩んでいるわけで特に「私」というものの独自性を示すことにはならないのではないだろうか。それに対して、ある場所である時に自分のみが「ウン、これが私だ」と感じたことは他との比較をこえ、一般的尺度に還元し難いものとしての独自性をもつと言える。前者のみならず後者のような視点からも「私」とは何かと云えてこそ「私」というものがわかってきたと言えるのではないだろうか。中年から老年にかけての課題のひとつとして、そのような「私」の発見ということがあげられるだろう[河合1993:147-150]。

河合氏のいう「私の発見」という言葉について考えてみたい。これは、星組劇団員の声と重なっている。こうした中高年に特有の第二の自分探しの意識と、演劇はどのように関わってくるのだろうか。

演劇は集団で行う行為である。例えば絵を描くことは、紙や鉛筆といった道具を用いて一人で行うことができるが、演劇で用いるのは自分の体と声であり、その創作過程には相手役や観客、スタッフなど多くの人達が関わっている。そのため、「星組」の劇団員募集要項には「健康で協調性のある人募集」と書かれている。しかし実際に来るのは反対のタイプ、つまりあまり協調性のないタイプが多い。だがこれはシニア劇団に限った話ではなく、若者を対象にした劇団でもそういう場合が多いのである。演劇というジャンルにそういう人を惹きつける何かがあるのだろうか。劇団「転形劇場」を率いていた劇作家の太田省吾氏は、演劇を必要とするのは日常に抑圧を感じている人だと言い、次のように述べている。

もし劇への演技への必然的経路と呼べるものがあるなら、それは彼の抑圧の感受の仕方が文学へ向かう者よりも、絵画へ向かう者よりも、より身体的、現実的であったことを意味していると考えられる。彼は抑圧感の最深部から、その実在をもって抑圧感のいちぶしじゅうを開こうとしたのだ。この実在をもって、身体をもってというところにあるにちがいない。この生きた身に感じる抑圧は、この生きた身をもって開き、放しようとしたのである[太田1975:79]。

太田氏の論に重ねて言えば、演劇では、参加者は自分の普段の身体と声を使って演技をする。歌を歌うには、音がとれる身体がなければならない。踊りを踊るには足が上がる身体がなければならない。しかし演劇にはそうした身体の制約がない。使うのはそのままの、生の身体である。これまでの自分の生き方を振り返り、ある種の欠落を感じた人々が、非日常である舞台という場に、自分の別の可能性を求めてやってくる。今まで足を踏み入れたことのない舞台という場所で、今までとは違う「私」に出会えるのではないかと期待する。

舞台という場は現実であり虚構でもある。その現実と虚構の狭間に自分の生の身体をどのように定位させることができるか。そこには、自分という存在を、この世界にどのように定位させるか、どのようにこの世界に存在するのかという、生き方に関わる問題が含まれていると思われる。

#### 4. 星組の練習内容

星組の週1回2時間の練習は、およそ次のように進行する。

1. ストレッチ体操(その日の体調を確認し、怪我を防止する。)
2. グループでのウォームアップ(全員で呼吸を合わせて一緒に動く、  
即興で相手と反対の動きをするなどして、グループの親和性を高める。)
3. 発声(声を届ける対象を意識して行う。)
4. エチュード(場面や人物設定に合わせて、即興的に演じる。)
5. テーマに沿って小作品を作り、発表する。

以下、進行に沿って練習内容を見ていく。

演技は全身を使って集団で行う。そのため、練習は自分の身体を確かめ、他の劇団員とコンタクトをとることから始まる。ストレッチ体操<sup>(1)</sup>の後、グループで息を合わせるウォームアップ<sup>(2)</sup>を行う。ゆっくり歩く、早足で歩く、ジャンプするという三つの動きを、全員で息を合わせて行う。リーダーを決めずに、三つの動きのうちどれか一つを全員で一斉に始め、一斉に終わるゲームである。リーダーがいないので、一人一人が他の人の気配やその場の空気を感じ取らなければうまくいかない。空間全体に向けて感覚を開く練習である。

その後、発声練習<sup>(3)</sup>をする。この発声練習で意識するのは、相手役や観客など、自分が話しかける対象に適切な大きさで声を届けることだ。声が小さすぎて相手に届かず手前で落ちてしまったり、大声を出しすぎて相手を通り越してしまうことのないよう気をつける。相手にきちんと声を当てることは、相手の身体ときちんと向き合い、関係をとることでもある。対象を意識しながら「あえいうえおあおあいうえお」といった一般的な滑舌練習を行い、その後、最近思っていることを一言付け加えてもらう。一例だが、ある時、ひとりの女性が「ばぺびぷべばばばばらりらお気楽に～」と言ったことがあった。これと同じ言葉を全員で繰り返す。この全員で繰り返すということが、グループの気持ちを共有したり、自分の感覚を広げるという意味で重要である。仕事で疲れて「お気楽」ではない状態のメンバーも、「お気楽に～」と繰り返すことでちょっとそんな気分になったりする。ひとりが「まめみむめもまもまみむめも もう一度恋がしたい！」という、他の劇団員は恋なんてとっくに忘れていたとしても、同じ台詞を言うことで「ああ、そんなこともあったな」と思ったり、言った当人も自分の声を聞いて「私はそう思ってたんだ」と気がついたりする。他人の言葉を自分の身体に通すことで、体感的に他の劇団員の状況や心情を共有することになる。ここで筆者が大切にしているのは、どういう内容を言っても受け止めてもらえるという雰囲気、グループの中に作っておくことだ。観客の前で生き生きと演技するためには、普段、他の劇団員の前でオープンな心の状態でいられる経験を積んでおくことが大事だからだ。

その後、毎回様々なテーマを決めて自分達で5～10分程度の作品を作ってもらう<sup>(5)</sup>。

「何かを手放す」というテーマで創作した時、ある劇団員は、専業主婦だった女性が熟年離婚をし、はじめての職場で生き生きと働く様子を演じた。ある日、別れた夫が女性の職場の前を通りかかるが二人は目を合わせないという結末で、これは夫に守られていた自分を捨てる＝手放すというストーリーだった。また、別の劇団員はお酒に溺れる父親の話を作った。家族は父を心配していたが、熱中できる趣味を見つけたことで父はお酒をやめられたという結末。依存心を手放すということだ。創作はどんな突拍子もない話でも構わないのだが、劇団員は大体自分の経験や、周りの人をヒントにして創作することが多い。

ここで、この自分の内にあるものをさらけ出すということについて考えてみたい。筆者は、高校生や大学生を対象に毎回様々なテーマで創作をしてもらっているが、彼らが自分の体験をそのまま作品にすることは非常に少ない。死後の世界とか、体験したこともない大恋愛とか、フィクションを好んで使う。体験自体が少ないということもあるが、それよりも自分をそのまま前に出すことが恥ずかしい、恐ろしいという感覚があるようだ。こうした感覚は中高年世代にはあまり見受けられない。

10代から20代、15名の参加者を対象にした演劇講座でのこと。二人ずつ組になって即興で相手と関わる練習をした。一人が相手に好意を持っている設定で、相手に何らかのアクションを仕掛ける、すると相手は即興的に何らかのアクションを返す。あるいは一人が相手

に敵意を持っている設定で、相手にアクションを仕掛け、それに相手がアクションを返すといった練習である。しかし彼らはなかなかアクションを起こさない。何とか一人が相手にアクションを仕掛けても、相手はモジモジしてリアクションしない。結局二人とも無表情になり止まってしまう。何度かそんな回が続き困っていた。そこである時、彼らに新聞紙で仮面を作らせ、それをかぶって同じ課題をやってもらった。すると彼らは別人のように動きだし、相手にちょっかいをかけたり、怒りをぶつかけたり、笑いあったりした。仮面を使ったワークは自意識と深い関係があり、「顔を隠すという要素があると、自意識と自己抑制が少なくなる」とされている[R.エムナー 2007:178]。仮面によって自分が思う自己像が隠され、これは日常の自分ではなく、この場での「役」であり、相手もこの場での「役」なのだと思った時に、彼らは本来持っていた自由な動きを表出したのである。一旦体を動かし、相手にもそれを受け入れられる体験をした後は、仮面を外しても、彼らは以前よりずっと自由に動くようになった。それほど自意識は体を縛るものなのだ。

しかし、中高年にはこうした自意識の壁がほとんど感じられない。同じ課題で、シニア劇団の参加者に即興的に相手にアクションを出す練習をしてもらおうと、素顔の時も仮面をつけた時も同じように演技する。素顔で堂々と演じていた人は仮面をつけても堂々と振る舞い、素顔で演じた時、途中で集中が切れて笑いだした人は、仮面をつけてもやはり途中で笑い出す。「仮面をつけて演技してみて、どうでしたか？」と聞くと、「別に意識は変わらなかった」、「まあ、お客さんの顔を見るのが少し楽になったくらいかな」とのことだった。若者の曖昧な自己像とは異なり、中高年の自己像は確立され、ある種の自信を備えている。その顔は、「こういう私」を他人に見せることに慣れている。逆に言えば、本人達は、今までとは違う新しい「私」に変身したいと思っても、「私」の仮面がしっかり素顔として定着してしまっている。そしてその身体にも長年培ってきた生活習慣、文化的背景などが色濃く反映されており、そこから大きく変化するのは若者よりずっと難しくなっている。中高年にとっての演技課題は、こうした確立された自己像をどの様に壊し、新しく構築することができるかということになる。

## 5. 役を演じるということ

演劇では様々なキャラクターを演じる。真面目に会社員をやってきた人が詐欺師を演じる。仕事中心で生きてきた独身女性が専業主婦を演じる。ある時は動物を、ある時は亡霊を演じる。何かを演じる時、劇団員は演じる役と素の自分との接点を探す。素の自分がその役に共感するところが全くないと、真実味のある演技ができず、役に入りにくくなるからだ。劇団員はなんとか自分とその役の繋がりを見つけて、その役に共感したい、理解したいと思う。その時必然的にこれまで自分が体験してきたことや、見てきた人物のことを思い出し、その役と繋がる場所がないかと探す。もしも自分がこの役だったらどういう気持ちか、どういう行動をとるか、あの時見たあの人はどんな表情をしていたか、動物に置き換えたらこの役は何だろうか…。頭の中の記憶、身体の中の記憶、想像力を総動員して繋がりを探す。そこで自分の内面や身体と向き合うことになる。演技は自分の身体を通す作業なので、役に対して違和感があると演技ができない。この役は理解できないとか、こういう人物は嫌いといった思い込みを

捨てて、フラットな状態に戻して、その役と向き合わざるを得ない。そこで自分が長年培ってきた人間に対する考えや思い込みを一旦留保するか、白紙に戻すかしなければならなくなる。この白紙に戻すという作業は、自分自身に対して起こることもある。自分と同じような境遇で簡単にやれると思っていた役が、やってみるとうまく演じられないことがある。子育てをしてきたのに母親役がうまくやれない、水商売をやってきたのにその役がうまく演じられないといった具合である。逆に自分とはかけ離れていると思っていた役が、案外うまくやれることもある。

演技をするようになって、自分や周りの人間について考えるようになったという劇団員は多い。アンケート⑤「演劇を始めて良かったことはなんですか」という問いに、劇団員は次のように答えている。

「60年の生活で身についた性格の傾向は変わるものではないが、自分が思い込んでいた自分から少し自由になれた気がする」「自分以外の人や物事に興味を持つようになった」「これまで遠慮、気配りにとらわれ真の自分を見失っていたところがあったが、普段の稽古を通して少しずつ心が解きほぐれ自分らしさを取り戻すことができた」「自分の中で封印して眠っていたものが解放され、同時に本来の自分を再発見できた」「みんなと創作することを通して融通をきかそうとか協調性を持とうとか自己改革を意識するようになった」。一方、アンケート⑥、⑦「演技をしている中で、苦しいこと、戦っていることはありますか?」という問いには、「セリフを覚える力がなくなってきている」「体調管理がうまくいかない」「演出家の要求にうまく答えられない時」「自分が好きではない人物の役を演じる時、その人の心情になるのが大変」等の答えが挙がっている。

参加者は役を演じることで、様々なキャラクター、相手役、演出家、観客、スタッフに出会う。そして思い通りにならない自分自身にぶつかる。演技をすることは、自分の内側に様々な他者を招き入れ、葛藤しながら、自分を揺さぶっていくプロセスでもある。この過程で、参加者は自分の自己イメージを壊されたり、未知の自分を発見することがある。

## 6. 公演

練習を経て、年に一度の公演が近づく。公演というのは観客という他者の前に自分が晒される機会である。本番では何とかいい演技をしようと劇団員は張り切る。ところでいい演技とは何だろうか?

現代演劇における演技には、バレエやピアノのようにお手本となる型はない。台本に指定されたセリフやト書きはあっても、それはあくまで書かれた文字であり、実際にどうやるかは演じる本人次第である。また作品によっても要求される演技は異なり、一概にこれがいい演技だとは言えない、曖昧なところがある。しかしいい演技に共通するポイントが一つある。それは「間」の良さである。どんな作品のどんな場面にも「間」が存在する。役者が間を外すと、観客はすぐさま察知し、一瞬にして場はしらける。ある役者が舞台上でおかしな間でセリフを言うとする。相手役がズッコケ、観客がズッコケ、スタッフがズッコケる。舞台には集団に共有される「今だ!」という「間」が確かに存在している。この「間」を感じ取り、うまく操ることができた時、「今のはいい演技だったな」ということになる。

「星組」に入る前から演劇の経験があり、この「間」がとれない劇団員がいた。例えば長く会っていなかった友人に道端で不意に声をかけられ、再会を喜ぶという場面。早く相手を認識しすぎる、早く喜ぶすぎる。指摘すると、今度は遅くなりすぎてわざとらしい。空間的な位置もおかしい。相手に接近しすぎる。「そんなに近づきますか？」と聞くと、今度は距離をとりすぎる。公演日が近づくにつれ、その人の間や位置の取り方はどんどん悪くなり、頭の中で考えてきたことを一人で再現しているという感じになっていく。困ってしまい「あなたの演技には相手役も観客もいないように見えるのですが、どうしてでしょう？」と聞いてみた。するとその人は「私は観客はいないと思ってます」と答えた。「観客に見られていると思うと緊張して集中できなくなるので、観客はいないことにしているんです。」という。別の劇団でそうすれば集中できると指導を受けたというのだ。それでは何度やっても間は取れないはずである。演技は自分と相手役と観客とスタッフ、その場に居合わせたすべての人々と作っていくものである。しかしその人は、観客からどう見られるか、どう評価されるかという恐怖で、自分の中から他者を消し去っていたのだ。

哲学者の鷺田清一氏は、「間」の問題について次のように述べている。

〈間〉というのは、そこにじぶんをあずけることによってじぶんの枠を緩めたり、目の前にいる他者のその他者としてじぶんを感じたりというふうに、そこにおいてじぶんが揺さぶられ、また捏ねられ、あらたなかたちをあたえられる、ときにはそこでじぶんを休める、いわば自己調整の場ではないのだろうか。わたしたちはコミュニケーションといえば、意思の一致、つまりコンセンサス(合意)をイメージするが、もしコミュニケーションを動機づけているものが、そのなかで各人が他者の存在とともにその前にいま疑いもなく存在するものとしてじぶんを感じることにあるとするならば、そこにおいてもっとも重要なことは他のひと、自分とは異なる他なる存在をそこにありありと感受するということであろう。[鷺田2015:90-91]

役者は演じているあいだ自分で自分を見ることはできない。自分がどの様に演じているのかは相手役がどう反応しているか、観客がどう反応しているか、その場の空気を感じとり、それを反射鏡にして体感するしかない。いい喜劇役者はある場面で笑いを取った時、全神経を集中させて次のセリフを言い出すタイミングをはかっている。もう少し粘って笑いが収まってから先に行くか、笑いにかぶせてそれに乗って先に行くか？早すぎても遅すぎても場は白けてしまう。演劇における「間」は、一人の想いによってではなく、「いま、ここ」を共有する人々の総意によって決まる。役者は舞台全体を感じ取り、自分をその時あるべきポジションに定位させる。「間」は、その役者の他者との関係のとり方を表すものである。

## 7. どんな「私」で終わりたいか？

公演が終わったある時、ある劇団員がこう言った。「この間子供に言ったんです。ママは最後は女優として死ぬからって」。その人はこれまで教師として生きてきた人である。また別の劇団員は「葬式には来なくていい、舞台を見に来てくれと友人たちに言っている」と語った。この

人はこれまで経営者として部下を率いてきた人だ。中高年は少なからず自分の死を意識して生きている。「私らほんま、あの角を曲がったら自分のお墓が見えてるんです。せやから今何をするかというのは切実な問題なんです」。

ある物静かな雰囲気のある劇団員がいた。稽古場では周りの状況に気を配り、どんな役割も笑顔でこなしていた。プライベートでは大家族の嫁の務めと仕事を両立させていた。そつのない身のこなしだったが、声が少し内にこもっている感じがかった。本人も自覚があり色々な発声法を試みるがあまり変化はなかった。公演が近づいたある日、その人に癌が見つかった。治療を受けながら本番を迎え、打ち上げの場で、その人は他の劇団員に初めて自分が癌であることを告げた。皆は驚き受け容れた。その後、稽古場でその人は短い作品を作り、自分は家にいると疲れること、一人で海を見ているときが一番落ち着くことを表現した。その人は今も治療を続けながら練習に通っているが、不思議なことに以前より伸びやかで力強い声を出すようになった。「なぜ前より声が出るようになったんでしょう？」と聞くと、「さあ、わかりません。とにかくここではストレスを発散しようと思ったんです」と言った。推測でしかないが、その人は病になったことで、死が迫っている現実を受け入れ、今の自分を受け入れ、そのままの自分を観客に投げ出す、その感覚を掴んだのではないかと思う。その心の開きが彼女の硬い喉をも押し開き、伸びやかな声となって表れたのではないだろうか。

シニア劇団の参加者は今からプロの役者やスターになろうとは思っていない。その意味では、ただ純粋に自分のためだけに演じている。アンケート⑩「これからシニア劇団でやりたいことは何ですか？」にという問いに対して、劇団員は次のように答えている。「自分の理解できない人物を演じてみたい。知らない自分を見つけられるかもしれないから」「自分の知らない世界(異次元)を見たい」、「悪人、変人、異人の役がしたい」「自分と正反対の役に挑戦したい」「見てくれた人に何かを残したい」。

舞台は相手役、観客、スタッフなど様々な関係性が網の目のように張り巡らされている場所だ。年齢を重ねた人が演技をすることは、長い時間をかけて社会の中で作り上げてきた自分を、その関係の網の目の中に放り込むことだ。それを観るのは、しがらみのない不特定多数の他者だ。役者が使えるのは自分の体と声、丸ごとの、生の身体だけだ。彼らは思うようには動かない身体で演じ続ける。これまでどのように生きてきたのか、そして人生の最後をどんな「私」で終わるのか？その答えを、彼らは舞台上で、生きた身を以て表現しようとする。

中高年が演劇をすることは、死から照射される生を探求しようとするに他ならない。彼らは役を演じるのではなく、演じることを通して、あるべき本来の自分を見出そうとしているように見える。自分で自分を「ウン、これが私だ」と言える瞬間を求めて。

## 参考文献

内閣府 (2018) 平成30年版高齢社会白書

朝日恵子(2015)「シニア演劇、その後」『上方芸能』195号 『上方芸能』編集部

園部由理恵(2015)「高齢者の演劇活動の展開－活動のねらいに着目した新聞記事の分析から－」『日本演劇学会紀要』日本演劇学会

大阪市ボランティア活動振興基金交付申請事業「福祉課題に取り組む調査研究支援」事業  
「60歳以上の劇団員を対象としたアンケート調査結果報告書(概要版)～演劇をはじめて変わったこと～」(2016.3.1)主催 スティックシアター

河合隼雄(1993)『中年クライシス』 朝日新聞社

太田省吾(1975)『太田省吾演劇論集 飛翔と懸垂』 而立書房

R.エムナー著 尾上明代訳(2007)『ドラマセラピーのプロセス・技法・上演－演じることから現実へ-』(株)北大路書房

鷺田清一(2015)『「聴く」ことの手 臨床哲学試論』 筑摩書房

表1 アンケート結果

## アンケート項目

- ① 星組の在籍期間
- ② 参加動機
- ③ 演劇経験の有無
- ④ 年齢を重ねて演劇を始めたことについて、良かったことはありますか？
- ⑤ 演劇活動の中で、楽しいことはありますか？
- ⑥ 演劇活動の中で、苦しいことはありますか？
- ⑦ 演劇活動の中で、「自分と戦っている」と感じることはありますか？
- ⑧ 演劇を続けている理由は何ですか？
- ⑨ あなたにとって演劇とは何ですか？ ひと言でお答えください。
- ⑩ 今後、シニア劇団でやってみたいことはありますか？

## A 60歳 女性

- ① 9年
- ② 30代から20年勤めていた職場が縮小されることになり退職した。次の仕事を探しつつヘルパーの資格をとりボランティアもしたが精神的に厳しかった。趣味として写真をやっていたが、思うようにならない孤独な作業が辛くなっていたところに劇団の広告をみた。カメラのような道具を使わずに自分の体で表現してみたらどうだろうと思い、説明会に行った。
- ③ なし
- ④ ある／成長する過程で自分が自分に持って来た人物像、あるいは他人から言われる人物像を自分だと思い込んでいたところがあったと思います。もちろん60年の生活で身についた性格の傾向は変わるものではないと思いますが、自分が思い込んでいた自分から少し自由になれた気がします。
- ⑤ ある／日常(介護や仕事)のことを考えなくていい時間であり、演じる人物に集中できること
- ⑥ ある／セリフを覚える時間や集中力がないこと。
- ⑦ ある／いつまで演劇が続けられるのか、いつまでセリフが覚えられるのか、いつまで体が動くのか、諦めることはいつでもできるのだから、いつか負けを感じる時まで戦いだと思います。
- ⑧ 9年間の公演で役をもらい、少しずつ役作りを考えるようになり、その人物の今に至る人生を考えるようになりました。自分の人生を重ね合わせて「あの時はどうだったろう」と考えることがあります。演じるということは、いつの間にか自分の人生を振り返っていることではないかと思います。それは楽しいことばかりではないのですが…。続けている理由はわかりません。
- ⑨ 一言で言うのは難しい。
- ⑩ 自分の理解できない人物を演じてみたら、知らない自分を見つけられるかもしれないと思ったりする。

**B 58歳 女性**

- ①7年
- ②50歳を機に、何か新しいことに挑戦したいと思った。自分を開放できる、自己表現ができる機会が欲しかった。
- ③なし
- ④ある／これまで色んなしがらみから遠慮、配慮、気配りにとらわれ真の自分を見失っていたようなところがありました。演劇活動から普段の稽古を通して少しずつ自分の心が解きほぐれ自分らしさを取り戻すことができてきました。またその上で、場の空気や相手の心情に寄り添っていくことが少しずつできるようになって来たように感じています。人と関わることが多い仕事なので、仕事にもとても役立っています。
- ⑤ある／日々の稽古が楽しい。メンバーが個性的で色んな刺激をもらい前向きになれます。公演に向け日々葛藤する中で、皆の気持ちが一致団結していく過程が楽しい。公演中、公演後の充実感、達成感が半端ない。
- ⑥ある／うまく演じられない時。
- ⑦ある／自分があまり好きではない役柄を演じる時。その人物の心情に達するのが大変。
- ⑧楽しいから。生きがいと言っても過言ではなく、人生のライフワークとしてずっと関わり続けて行きたい。
- ⑨みるのも楽しいが、やってみるともっと楽しい。人生で最も大切なスパイス。

**C 68歳 女性**

- ①9年
- ②仕事を辞めてから何かしたいと思っていた。それが何なのか日々考えていた。新聞で劇団員募集の記事を見つけて「これだ」と思った。「このまま終わるんやろか」という焦りから解放されて、安定した日々となった。
- ③なし
- ④ある／日々の目的、張り合いがあります。1週間、1年があっという間。テレビや映画の役者のセリフや動きに目がいくようになりました。
- ⑤ある／公演の練習に入る前に、出される課題に沿ってそれぞれが自由に演じるときです。団員の意外な面や、「なるほど」と思うことも多々あり、面白いし楽しい。
- ⑥ある／公演の練習に入ったとき。長くやっているのに役をつかんで演じられない自分。セリフの言い方がバラバラな気がします。経験だけではない、その人のセンスなんでしょうね。いざ本番、胃が痛い、ハラハラドキドキ。
- ⑦ある／上記の理由で公演ごとにもうおしまいになろうと思ってしまいます。戦っているレベルに到達していないのかも。とちらないようにするのが精一杯です。
- ⑧なのにまだやってる。演劇から離れられない自分はなんなのか？やりがい、楽しみ、日々の生活の柱の一本になっているのでは？
- ⑨老いて生きていく上での、糧の一つ。
- ⑩悪人、変人、異人の役がしたい

## D 67歳 女性

- ①3年
- ②自分の居場所探し
- ③なし
- ④ある／落ち着きができた。自分以外の人、物事に関心を持つようになった。協調性  
ができつつある。執着することが少なくなった。他人の話を聞けるようになった。
- ⑤ある／大声を出せる。日常使わない言葉を発せられる。基本的には自分であるが  
役の人になって考えられる。毎週小さな旅ができる。
- ⑥ある／セリフがなかなか覚えられない。体が思うように動かないとき。
- ⑦ある／演技など他人と比較してしまう時がある。「とにかく集中しろ」と考えるよ  
うにしている。自惚れは禁物(たまに出てくる)。
- ⑧好きだから、健康な限り続けて行きたいと願っています。ほんま星組さんと先生  
に出会えてよかった。
- ⑨進め！感じること。
- ⑩いろんなタイプの人を演じたい。自分の知らない世界(異次元)を見たい。

## E 62歳 女性

- ①2年
- ②京都リビング新聞で星組の記事が載っていたのを見た。生き生きした表情がとて  
も素敵だったので入りたいと思った。
- ③なし
- ④ある／自分の経験が活かされてるような気がするし、引き出してくれてるような  
気がする。
- ⑤ある／週一回自分の居場所がある。
- ⑥ある／セリフが覚えられない。
- ⑦ある／風呂で呪文のようにセリフを繰り返す、大変だけどやりがいがある。
- ⑧私が80歳になったときの姿を先生が演出してくれると信じて頑張っている。星組  
の先輩や仲間が優しい。しょうもない質問してもちゃんと答えてくれる。嫌な人  
がいない集団でめずらしいと思う(自分の職場環境と比べるからからかな)。
- ⑨元気の源
- ⑩喜劇！見に来てくださるお客様が「面白かった！」と言うてくれるような明るい  
劇がしたい。

F 59歳 女性

- ①1年
- ②自分を表現するということを試してみたかった。
- ③なし
- ④ある／経験知が増えている。
- ⑤ある／大きな声が出せるようになりました！
- ⑥特にならない
- ⑦特にならない
- ⑧非日常の時間が持てるから。
- ⑨自己表現の場
- ⑩なんでも挑戦したい

G 61歳 女性

- ①2年
- ②もともと芝居をしたかったのと、先生に出会えたこと。
- ③なし
- ④ある／自分の中で封印して眠っていたものが解放され、それと同時に本来の自分を再発見できました。若い時から演劇をしていたら、このような純粹の気持ちのままではいられなかったかとも思います。作品の読み方や人物の掘り下げも、今のほうが落ち着いてわかることがあるかもしれません。
- ⑤ある／友人が増えた。その方達と芝居や役について語るのが楽しい。公演に向けて苦しみながら精進するのが、辛いながらも喜びのほうが多い。落ち込んだり、よかったと思ったりすることが楽しい。
- ⑥ある／先生に言われたことをうまく演じたり体で表現したりできないとき。でもこの苦しさがないと、つまらないかもしれません。
- ⑦ある／セリフが入るかどうか。仕事や生活の雑用で時間が苦しいとき、公演が近づくと眠れなくなる時など。嫌な戦いではありませんが。
- ⑧色々な役を演じてみたいから。演劇に参加できることが喜び。今は推理小説しか読まなくなりましたが、演劇を練習して作品を公演に向けて仕上げていくために、先生の指示やアドバイスにそって演じていくことが、作品を読み味わうことだと思えるから。
- ⑨本来の私。夢は形を変えて叶うものだと教えてくれるもの。趣味というわけではない、もっと大事なもの。
- ⑩いろんなジャンルの演劇に挑戦したい。古典物、ロマンス。「シニアが？」と驚いてもらいたい。

## H 72歳 男性

- ①9年
- ②阪神大震災で自分の生き方に激震が走った。企業戦士として馬車馬の如く人生を走って来た自分。人間いつどこで何が起るかわからない。今までの生きかたでいいはずがない。18才の時の夢「役者になる」ことに挑戦しようと思った。
- ③ある
- ④ある／生活リズムが整った。体力の維持、強化、脳の活性化。みんなと創作する事を通して融通をきかそうとか、協調性を持とうとか、自己改革を意識するようになった。「老いとは年齢のことではなく精神が朽ちていくこと」を再認識した。
- ⑤ある／発声の一言を通して、仲間の心情を共有できること。考え方や意見を交換できる仲間がいること。公演体制に入って、思いつきや自己反省など、そんな空間に身をおいていること。
- ⑥ある／演出の要求指導に応えられないこと。
- ⑦ある／演出の要求指導になんとしても答えようともがく時。
- ⑧芝居が好きだから。お客さんが公演を楽しみにしてくれるから。認知症の抑制に役立つかもしれないから。身体と精神を保つことの支えになっているから
- ⑨感謝、合掌
- ⑩特になし

## I 61歳 女性

- ①9年
- ②昔から、いつかやりたいと思っていた。
- ③ある
- ④ある／チームで何かを作り上げることは日常ではないから。人前に立つということ。
- ⑤ある／仲間との関わり、芝居をすること自体が楽しい。人が演じているところを見る時。一生懸命になれるものが生活の中にある。先生の指導。
- ⑥特にない
- ⑦特にない
- ⑧好きなことだから。仲間と意見をぶつけ合い、時にはムツとなりながら議論できる時、まだ生きているという手応えを感じたり、熱くなったり、まるで学生のように変身している自分がある。
- ⑨幸福
- ⑩見てくれた人に何かを残したい

## J 70歳 女性

- ①9年
- ②仕事を辞め、新しい楽しみに挑戦したいと思いました。
- ③なし
- ④ある／普段の生活とは違い、緊張感を持って仲間とやり遂げることが楽しい。いつもドキドキハラハラですが、やめられない。
- ⑤ある／仲間が成長していくこと。仲間が増えること。私も「変わってきたね」と言われて、演劇がだんだん楽しくなってきました。
- ⑥ある／セリフが覚えられないこと、体調管理。突発事故などで参加できなくなる不安。
- ⑦ある／上手にできないとか、後ろ向きになる時。「役に集中」と言い聞かせる。
- ⑧星組だから、先生だから続けられています。
- ⑨自分を確認できるもの、自分を省みることができるもの。
- ⑩特になし

## K 67歳 女性

- ①8年
- ②高校卒業後、劇団に入りたかったが叶わなかった。大病を経験した後、演劇をやり直したいと思った。
- ③ある
- ④ある／物の見方が広がった。でも身体の維持、記憶力の維持が年々大変。
- ⑤両方／できあがるまでの過程で「うん！」と感じる楽しさ、「違うな」と感じるしんどさ。
- ⑥ある／体の維持がしんどい日もあり。
- ⑦ある／記憶力の低下、言葉の話し方も「あれ、それ」のみになってしまう。
- ⑧まだ稽古をやりきれてないと思っているから。
- ⑨思春期からの目標
- ⑩自分と違う役に挑戦したい

## L 73歳 男性

- ①2年
- ②声を出すことが楽しそうだったから。
- ③なし
- ④ある／外に出るようになった。
- ⑤ある／体を動かす、声をだす。
- ⑥ない
- ⑦ない
- ⑧声をだすことが楽しいから。
- ⑨まだわからない
- ⑩まだわからない